

保育・教育実践における言葉がけの意味

—非言語的かかわりと言語的かかわりの観点から—

企画・話題提供：	若山育代	富山大学
話題提供：	岡花祈一郎	福岡女学院大学
話題提供：	野中陽一朗#	兵庫教育大学教職キャリア開発センター
ファシリテーター：	田中浩司	福山市立大学
ファシリテーター：	若林紀乃	広島文化学園大学

企画主旨 保育・教育の現場では、保育者や教師は子どもに様々な言葉がけをする。その言葉がけは、子どもの遊びを発展させるためであったり、思考を広げさせるためだったりする。このように、保育者や教師が何らかの言葉がけを子どもにする際には、保育者や教師は笑顔をみせたり言葉に抑揚をつけたりするなど、非言語的な情報も同時に子どもに伝えている。こうした非言語的なかかわりの重要性は、これまで繰り返し議論されてきたところではあるが、非言語的かかわりと言語的かかわりの両側面から、総合的に、保育者及び教師が子どもに対して行う言葉がけの意味を検討した研究は少ない。そこで、本ラウンドテーブルでは、非言語的かかわりと言語的かかわりの両観点から、大人が子どもに言葉をかけることにはどのような意味があるのかを議論する。

幼児の造形的見立てに対する保育者の言葉がけ（若山育代） 数名の年長児が、制作コーナーに置いてある台形の画用紙の端切れを「お化け」に見立てて「お化け飾り」を作っている。幼児がこのような好きな遊びの中で造形的な見立てを行う姿は、保育の場では多く目にすることができる。ところで、保育者とは、子どもたちの遊びの盛り上がり生まれつつある場面で、子どもの遊びに「気を合わせ」存在である（小川，2012）。そのため、上述した造形的見立ての事例でも、保育者が幼児の造形的見立てについて気を合わせ、「怖いお化けの飾りができたね」と言葉をかけていた。これまでの研究からは、こうした援助を保育者が行うことは明らかであるが、幼児の造形的見立てに対して保育者が言葉をかけ、気を合わせることが幼児の育ちにとってどのような意味を持つのかについては議論されていない。そこで当日は、「自分がこの類似に気付いた」という形態的類似の発見に対する自信という観点から議論したい。

保育・教育実践に有効な言語的・非言語的行動研究を求めて（野中陽一朗） 保育者および教師の言語的・非言語的行動が、保育・教育実践において重要な役割を果たすことは明らかなことであろう。しかし、非言語的行動研究には、行動測定の困難さを要することが多い。そのため、実際の保育・教育現場を対象とした検討が不十分だと考えられる。本発表では、筆者が関与した保育・教育現場を対象とした2種類の研究データ（池田・佐々木・野中・沼・井上，2011；野中，2011）に基づき、保育者および教師の言語的・非言語的行動について検討する。前者は、保育場面で採取されたかかわりを保育経験のある観察者がM-GTAに基づき、経験知を通し、かかわりの種類と特徴を構造化したものである。一方、後者は、教育場面で定量的な行動観測より見出された教師の非言語的行動を採取し、分類するというものである。2種類の研究方法が異なる報告から、保育・教育実践に有効となる言語的・非言語的行動研究のあり方や改善について考えていきたい。

ことば、意味、コミュニケーション（岡花祈一郎） 本話題提供では、ヴィゴツキー及びウイトゲンシュタインの議論を手がかりとして、保育教育実践における言語的言葉がけ、非言語的言葉がけの差異とその意味について理論的な考察を行う。第一に、ヴィゴツキーの最近接発達領域における「他者」の概念に関する再検討を行う。第二に、後期ウイトゲンシュタインの「言語ゲーム」に関する議論を手がかりに他者性の問題とコミュニケーションについて整理する。これら二つの理論的な議論を踏まえ、本発表では、他者としての教師・保育者の教育的な意図の範疇を超える子ども、保育者と子どもの間に起こる葛藤やミスコミュニケーションの可能性とそこにはらむ教育の暴力性を指摘する。従来語られてきた「保育者・教師-子どもの相互作用」、「応答的関係性」といった予定調和的なコミュニケーションではない、保育・教育実践において生起しうる多様な言葉がけの可能性について提案したい。